教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 心理学科　　資格： 准教授　　氏名： 竹中　一平

研究分野	研究内容のキーワード
社会心理学	流言,友人関係,ストレス
学位	最終学歴
博士（心理学）,修士（心理学）,学士（人間科学）	筑波大学大学院 人間総合科学研究科 心理学専攻 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.アクティブラーニングの実践	2017年4月～現在	科目：「専門演習ＩA」「専門演習ＩB」「専門演習ⅡA」「専門演習ⅡB」 概要：卒業論文の執筆を念頭に置いたアクティブラーニングを実践している。特に、「PDCAの流れに沿って一連のプロジェクトを完遂する」ことを目標とし、その具体として研究活動を行うように指導している。
2.双方向型授業の実践	2015年9月～2019年1月	科目：心理アセスメント実習 概要：当科目において、双方向型授業を実践した。具体的には、質問紙形式の心理アセスメントの実習において、教員がテスターとして実施したり、学生同士でそれぞれテスターとなって実施したりする中で、相互にコミュニケーションをしながら授業を展開した。
3.双方向型授業の実施	2012年4月～2018年1月	科目：心理実験実習Ｉ・Ⅱ 概要：調査法と生理実験を担当した。それぞれにおいて、5～10名程度を1グループ（全6グループ）として、各グループが個別に実施する研究の指導および、研究レポートの執筆の指導を行った。
4.マルチメディア機器の利用	2012年4月～2012年7月	科目：オフィスワークの情報処理 概要：コンピュータを用いた演習形式の授業を行った。コンピュータの基本的な使い方、情報リテラシーについて簡単に講義をし、Microsoft Office Word2007、Excel2007、PowerPoint2007の利用方法について、実際にコンピュータを操作しながら学習した。特に、案内状や稟議書、給与計算など、実務場面で使用する可能性が高い文書やExcelシートの作成指導を重点的に行なった。
5.マルチメディア機器の利用	2010年9月～2011年1月	科目：情報処理演習 概要：前期の情報処理基礎で十分に課題が実施出来なかった学生を対象とし、Microsoft Office Word2007、Excel2007、PowerPoint2007の利用方法について、前期の復習をしながら、個別指導に重点をおく形で学習した。
6.マルチメディア機器の利用	2010年4月～2010年9月	科目：情報処理基礎 概要：コンピュータを用いた演習形式の授業を行った。コンピュータの基本的な使い方、インターネットや電子メールの利用方法、Microsoft Office Word2007、Excel2007、PowerPoint2007の利用方法について、実際にコンピュータを操作しながら学習した。
7.マルチメディア機器の利用	2010年4月～2012年1月	科目：卒業予備研究(A)(B)・卒業研究(A)(B) 概要：保育現場で活用できる情報処理技術を習得するために、コンピュータを利用した。具体的には、各種文書・チラシの作成や、デジタルカメラでの撮影および撮影した画像の処理、デジタル紙芝居の作成、パソコンを用いたお絵かき等の活動を行った。
8.マルチメディア機器の利用	2010年4月～2010年7月	科目：ワープロ演習(A) 概要：Microsoft Office Word2007の利用に特化し、各種機能の使用方法についてコンピュータを操作しながら学習した。また、保育現場で利用する頻度の高いお便りやチラシ、ポスター等を実際に作成した。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
9.双方向型授業の実施	2008年4月～2008年7月	科目：心理学基礎実験 概要：対人距離を題材とした実験実習を担当した。事前に仮説を立てて実験を行い、得られたデータについて解析を行った。その結果について、学生と議論をしながら、結果のまとめと考察、それらを踏まえたレポート執筆について説明をした。
10.マルチメディア機器の利用	2006年4月～2007年1月	科目：コンピュータ演習Ⅰ・Ⅱ 概要：コンピュータを用いた演習形式の授業を行った。コンピュータの基本的な使い方、インターネットや電子メールの利用方法、Microsoft OfficeやSPSSをはじめとしたいくつかのソフトウェアの利用方法について、実際にコンピュータを操作しながら学習した。
2 作成した教科書、教材		
1.「心理学統計法（応用）」教材作成	2019年9月～2024年1月	心理・社会福祉学科心理コース開講科目「心理学統計法（応用）」で使用するワークシート型の教材を作成している。教材の内容は、授業内容に関する学生からのコメントに記載された意見や質問に基づき、毎年更新した。
2.「心理学統計法（基礎）」教材作成	2019年4月～2024年1月	心理・社会福祉学科心理コース開講科目「心理学統計法（基礎）」で使用するワークシート型の教材を作成した。教材の内容は、授業内容に関する学生からのコメントに記載された意見や質問に基づき、毎年更新した。
3.「応用心理統計法」教材作成	2017年9月～2018年1月	心理・社会福祉学科心理コース開講科目「応用心理統計法」で使用するワークシート型の教材を作成した。
4.「心理統計法入門」教材作成	2017年4月～2017年7月	心理・社会福祉学科心理コース開講科目「心理統計法入門」で使用するワークシート型の教材を作成した。
5.スタンダード自己心理学・パーソナリティ心理学	2015年11月10日	【担当部分】第2章「パーソナリティの諸理論」および第7章「友人関係・恋愛と自己・パーソナリティ」7.1～7.4 【概要】第2章ではパーソナリティに関する主要な理論を紹介し、第7章では友人関係とパーソナリティとの関連についてまとめた。
6.「心理アセスメント実習」教材作成	2015年9月～2019年1月	心理・社会福祉学科心理コース開講科目「心理アセスメント実習」で使用する教材を作成した。教材の内容は、授業中の学生からのフィードバックに基づき、毎年更新していた。
7.質問紙調査と心理測定尺度	2014年7月10日	【担当部分】第7章「データの整理」 【概要】質問紙調査において、質問紙を回収してからデータを入力し、得られたデータの単純集計を行うまでの一連の過程について解説した。特に、ExcelやSPSSの活用を念頭に置き、それらのソフトウェアの具体的な使用方法も踏まえて解説を行った。
8.「対人関係の心理学」教材作成	2014年4月～2020年3月	心理・人間関係学科開講科目「対人関係の心理学」で使用するワークシート型の教材を作成した。教材の内容は、授業時のミニッツペーパーに記載された意見や質問に基づき、毎年更新した。
9.「社会心理学」教材作成	2014年4月～2014年7月	心理・社会福祉学科心理コース開講科目「社会心理学」で使用するワークシート型の教材を作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.公開講座　講師	2011年11月26日	公開講座「大地震発生時の避難所生活」の講師として、大規模災害時の避難所生活に関する説明及び、避難所運営訓練システム（STEP）の実施を行った。
2.公開講座　講師	2010年7月3日	公開講座「大地震発生時の避難所生活」の講師として、大規模災害時の避難所生活に関する説明及び、避難所運営訓練システム（STEP）の実施を行った。
4 その他		
1.2024年度心理学科2年C組担任	2024年4月～2025年3月	心理・社会福祉学部心理学科2年C組の担任として、学生指導を担当した。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
2.2023年度心理学科1年C組担任	2023年4月～2024年3月	心理・社会福祉学部心理学科1年C組の担任として、学生指導及び初期演習を担当した。
3.オープンキャンパス体験授業　担当	2022年9月25日	2022年度オープンキャンパスにおいて、「自律神経系の働きとストレス」のテーマのもと体験授業を行った。
4.オープンキャンパス体験授業　担当	2021年8月9日	2021年度オープンキャンパスにおいて、日常記憶の心理学―あなたの記憶は正しい？―」のテーマのもと体験授業を行った。
5.2021年度心理・人間関係学科2年A組担任	2021年4月～2022年3月	短期大学部心理・人間関係学科2年A組の担任として、学生指導を担当した。
6.2020年度心理・人間関係学科1年A組担任	2020年4月～2021年3月	短期大学部心理・人間関係学科1年A組の担任として、学生指導及び初期演習を担当した。
7.2019年度心理・人間関係学科2年A組担任	2019年4月～2020年3月	短期大学部心理・人間関係学科2年A組の担任として、学生指導を担当した。
8.高大連携事業（附属高校2年対象の出張講義）担当	2019年2月5日	「人助けの心理学」というテーマで、2コマの出張講義を行った。
9.オープンキャンパス体験授業　担当	2018年8月10日	2018年度オープンキャンパスにおいて、「心理学の実験を体験しよう」のテーマのもと体験授業を行った。
10.文化部委員会　顧問	2018年4月～2021年3月	文化部委員会の定例会に出席するとともに、文化部委員会の運営について助言・指導を行った。
11.2018年度心理・人間関係学科1年A組担任	2018年4月～2019年3月	短期大学部心理・人間関係学科1年A組の担任として、学生指導及び初期演習を担当した。
12.心理・人間関係学科幹事会　顧問	2017年4月～2020年3月	幹事会に出席するとともに、幹事会の運営や幹事懇談会の開催について助言・指導をした。また、学生部や学科からの連絡事項を伝達した。
13.データ分析や統計ソフトの利用に関する学生指導	2012年4月～2023年3月	情報処理準備室の業務の一環として、相談に来室した学生にデータ分析に関するアドバイスや統計ソフトの利用に関する指導を行った。
14.保育実習（施設実習）　担当	2009年4月～2010年3月	施設実習の担当として、事前指導の中で、実習に関する心構えや実習先施設の概要、実習に関する注意事項の説明、実習に対して不安をもつ学生への個別対応をはじめとした学生対応を行った。また、実習先施設との交渉や実習巡回指導に関する教員分掌の作成および教員への依頼をはじめとした実習に関連する各種事務作業を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.認定心理士(登録番号：第38965号)	2012年10月	これまでに取得した学位を評価され、「認定心理士」の資格を取得した。当資格は、心理学に関する標準的な基礎知識と基礎技術とを正規の課程において修得していることを認定するものである。当資格によって、心理学に関わる講義を行うために必要な基礎知識・技能を、問題なく備えていることが示されると考える。
2.専門社会調査士(登録番号：第001398号)	2008年10月	「大学生の日常会話におけるうわさの類型化」の論文が高く評価され、「専門社会調査士」の資格を取得した。当資格は、社会調査の知識や技術を用いて世論や市場動向、社会事象等を捉えることのできる能力を有する社会調査の専門家に与えられる資格である。アンケートや面接等の指導において大いに活躍できると期待される。
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.危機対応に係る専門研修　講師	2023年8月28日～2023年9月4日	芦屋市職員を対象として開催された2回の研修において、講師としてうわさのマネジメントについて説明した。
2.河合塾「未来へのトビラを拓く『情報』講座」の講義映像の提供	2018年1月28日	河合塾の主催するWeb講座である「未来へのトビラを拓く『情報』講座」の第4回において、統計リテラシーに

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
3.「避難所運営訓練システムによる防災教育のあり方」に関する勉強会　講師	2008年5月16日	関する講義映像を提供した。 東京電力技術開発研究所において開催された「避難所運営訓練システムによる防災教育のあり方」に関する勉強会において、講師として「避難所運営訓練プログラム（STEP）」の紹介および、実施を行った。
4 その他		
1.DX構想委員会　常任委員	2024年9月～現在	DX構想委員会常任委員として委員会に出席するとともに、委員会運営の補助やLMS導入に関する情報収集を行った。
2.学科情報業務主担	2023年4月～現在	学科の情報関係業務の主担として、業務管理システム（kintone）の管理や、情報機器の管理の取りまとめを行った。
3.学科施設業務主担	2023年4月～現在	学科の施設・設備・図書業務の主担として、備品消耗品・学科管理教室の管理の取りまとめを行った。
4.学科予算業務主担	2023年4月～現在	学科の予算業務の主担として、予算計画の立案や予算申請・執行の取りまとめを行った。
5.幹事教授（内務）補佐	2023年4月～現在	幹事教授（内務）の補佐として、教務や施設、予算、倫理関係を担当する幹事教授を補佐した。
6.学科研究倫理業務主担	2023年4月～2025年3月	学科の研究倫理業務の主担として、研究倫理審査の取りまとめを行った。
7.学科卒論・修論業務主担	2023年4月～2025年3月	学科卒論・修論業務の主担として、指導教員の配属や各種発表会、提出の管理等の取りまとめを行った。
8.学科教務業務主担	2023年4月～2025年3月	学科教務の主担として、学科予算の計画や執行、管理の取りまとめを行った。
9.教務委員	2023年4月～2025年3月	教務委員として教務委員会に出席するとともに、学科との連絡調整を担当した。
10.学科資格業務主担	2023年4月～2024年3月	学科の資格業務の主担として、資格申請や認定団体との対応の取りまとめを行った。
11.心理学科開設準備WG	2022年9月～2023年3月	心理学科の開設準備を行うWGに参加した。学科開設に伴う役割分担の検討や基盤システムの整備、事務体制の変更などを行った。
12.心理総合系WG	2021年9月～2022年9月	新学科のカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの作成を目標とし、特に実用系・研究系科目の科目目的や概要の作成および、履修モデルの作成を行った。
13.卒論・修論WG　主担	2021年5月～2023年3月	卒業論文及び修士論文の改革を行うワーキンググループの主担当として、卒論・修論のあり方やその制度について検討した。
14.研究倫理審査運営	2021年4月～2023年3月	研究倫理担当の幹事教授の下、コロナ禍における研究倫理審査を実施するための新たな審査の仕組みを開発し、その運営を行った。
15.研究倫理審査委員（心理）	2021年4月～2023年3月	学科研究倫理審査委員として、学部心理コース、大学院臨床心理学専攻、心理領域教職員の申請書の審査を行った。
16.紀要編集委員会委員	2021年4月～2022年3月	
17.3つのポリシー統括	2021年4月～2022年3月	短期大学部心理・人間関係学科、文学部心理・社会福祉学科、大学院臨床心理学専攻の3つのポリシー作成において、その統括と調整を行った。
18.心理領域緊急対応ワーキンググループ	2020年4月～2022年3月	2020年4月の緊急事態宣言を受け、学科業務や授業運営に関する緊急対応のためのワーキンググループのメンバーとして活動した。
19.学科情報管理担当	2019年4月～2023年3月	心理・社会福祉学科の情報管理担当として、各準備室PCのバックアップ体制の構築、重要情報（在学生情報、卒業生情報、カリキュラム情報等）の管理体制の構築に携わった。
20.心理コース学部構想カリキュラム検討ワーキンググループ	2019年4月～2019年8月	学部構想立案に向けた一般就職希望者向けのカリキュラム整備を行うためのワーキンググループに参加した。
21.地域別教育懇談会（高松会場）	2018年9月8日	地域別教育懇談会（高松会場）の担当として、会場において保護者の方と懇談を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
22.私立清教学園中・高等学校での実践授業の実施	2018年5月28日～2018年6月29日	清教学園中・高等学校の高１クラスを対象とした、データリテラシーに関する実践授業に参画した。特に、統計に関する授業内容の検討や、生徒の属性を測定するための質問の作成、授業の効果測定に関するテストの作成を中心に協力した。
23.大学院臨床心理学専攻　専攻委員会委員	2018年4月～2023年3月	
24.学生部　常任委員	2018年4月～2021年3月	学生部常任委員として学生部常任委員会に参加した。また、文化部委員会の顧問として、文化部委員会定例会に参加し、学生指導を行うとともに学生部との連絡・調整を行った。
25.公認心理師対応プロジェクト　学生対応チームリーダー	2018年4月～2019年3月	公認心理師に関する学部学生への対応として、学生からの質問の対応や編入生対応に関する計画立案等を行った。
26.公認心理師対応プロジェクト　予算チームリーダー	2018年4月～2019年3月	公認心理師関連の予算計画の作成、執行の管理等を担当した。
27.公認心理師対応プロジェクト　制度設計チーム	2018年4月～2019年3月	大学院および学科において、公認心理師を養成するために実施される学内・学外実習を円滑に運営し、学生の実習時間等を管理するための制度設計を進めた。主に、学生・実習施設・教員および学科事務の連携体制、文書管理の手続き、学生の実習時間管理に係る手続きを検討した。
28.公認心理師対応プロジェクト タスクフォース	2018年4月～2019年3月	公認心理師対応プロジェクトの主体である実習委員会における議題のとりまとめと原案作成、および各タスクチームに含まれないタスクを解決する役割を担った。
29.公認心理師対応支援プロジェクト	2018年3月～2018年4月	公認心理師養成のための課題整理、タスク整理等をすすめ、公認心理師対応プロジェクトを立ち上げた。公認心理師対応プロジェクトの立ち上げにあたり、チーム編成、役割分担、プロジェクトの目的を明確にした。このプロジェクトは、公認心理師対応プロジェクトの立ち上げをもって終了した。
30.カリキュラムスリム化ワーキンググループメンバー	2017年12月～2018年3月	カリキュラムのスリム化に向けて、大心および短心のカリキュラムの検討を行った。
31.研究倫理審査システム管理	2017年4月～2021年3月	学科研究倫理審査システムのシステム管理を担当した。
32.学生委員	2017年4月～2020年3月	学生委員（短心）として学生委員会へ出席するとともに、短心幹事会の顧問を担当した。
33.スマートキャンパス連絡係	2017年4月～2018年3月	スマートキャンパス連絡係として、スマートキャンパス連絡会に参加するとともに、「スマートキャンパス」に関連する情報の学科への連絡を担当した。
34.大学院臨床心理学専攻　専攻委員会委員	2016年4月～2017年3月	
35.平成27年度教育改革・改善プラン事業への応募の採択	2015年8月21日	平成27年度「教育改善・改革プラン」の募集に「授業改善のための研究会制度の設立」として応募し、提案内容が採択された。
36.学科倫理審査運営委員会委員	2015年4月～2017年3月	心理・社会福祉学科、心理・人間関係学科、文学研究科臨床心理学専攻の研究倫理審査に関わる運営委員会の委員を務めた。
37.学科倫理審査ワーキンググループ　委員	2015年3月～2016年	心理・社会福祉学科、心理・人間関係学科、文学研究科臨床心理学専攻の研究倫理審査に関わるワーキンググループの委員を務めた。特に、研究倫理審査システムの開発において、開発業者とのやり取りや、開発されたシステムの修正、各種登録作業を行った。
38.平成25年度「専門教育における協同学修及び知的創造活動の拠点づくり」事業　学科事務担当者	2013年4月～2014年3月	左記事業に、学科側事務担当者として参加した。当該事業は、33メートル×23メートルの1フロアを、無線LANによるネットワーク環境を備えた、アクティブラーニングが可能な心理実験室を含む3教室と3小実験室、TAが常駐し学生の「居場所」となる1室に改修する事業であった。具体的な職務内容は、学科教職員の意見集約と調整および、改修に関する学科案の取りまとめと、学科案を踏まえた大学施設課および施工担当業者

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
		との交渉であった。
39.学科コンピュータ室　管理担当	2012年4月～2022年9月	心理・社会福祉学科のコンピュータ室の管理業務に携わっている。具体的には、保守業務を委託している業者とのやり取り、教室の環境維持、予算管理、コンピュータの利用や統計処理に関する学生からの質問対応、学科教職員および学生のアカウント管理、各端末のへのアクセスログの収集と分析を行った。
40.人間学研究会　総務理事	2012年4月～2017年3月	心理・社会福祉学科の教職員・学生による組織である人間学研究会の総務理事を担当した。具体的には、予算案および事業案の作成と、学生向け講座事業（就職試験対策講座、保育士試験対策講座、公務員試験対策講座、先輩－後輩の交流会など）の運営、講座を委託している外部業者との交渉を担当した。
41.学科広報委員（HP担当）	2012年4月～2015年3月	心理・社会福祉学科の広報委員として、学科ホームページの運営・管理業務に携わった。具体的には、ホームページの更新・修正作業を行った。
42.岡山短期大学　平成23年度自己点検・評価　ALO補佐	2011年4月～2012年3月	平成23年度自己点検・評価活動において、ALO補佐として平成24年度に提出する自己点検・評価報告書の作成に携わった。具体的には、平成24年度第三者評価ALO対象説明会への参加や、学科内での提出文書・資料の管理、提出・備付資料の準備、資料一覧の作成を担当した。また、報告書の執筆では、基準Ⅰ－Ｂ、基準Ⅱ－Ａ－４、基準Ⅱ－Ｂ－１観点（３）を担当した。
43.岡山オルガノンe-Learning委員会　委員	2010年4月～2012年3月	平成21年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）として採択された事業「岡山オルガノン」の部会であるe-Learning委員会の委員として会議に参加するとともに、岡山オルガノンと大学間の各種連絡業務に携わった。
44.岡山オルガノン双方向コンテンツ委員会　委員	2010年4月～2012年3月	平成21年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）として採択された事業「岡山オルガノン」の部会である双方向コンテンツ委員会の委員として会議に参加するとともに、岡山オルガノンと大学間の各種連絡業務に携わった。
45.岡山県養護実習委員会　書記	2010年4月～2011年3月	岡山県養護実習委員会書記として、委員会開催時の議事録作成や委員会の運営に携わった。
46.岡山短期大学・岡山学院大学紀要　編集委員	2009年4月～2012年3月	岡山短期大学・岡山学院大学紀要編集委員として、紀要の編集作業を担当した。編集は2名の教員で担当し、平成21年度は補佐として主に紀要への執筆依頼や投稿された原稿の処理を行った。平成22年度・23年度は主担当として、統括および予算獲得・管理、業者とのやり取りを担当した。
47.岡山県養護実習委員会　委員	2009年4月～2011年3月	岡山県養護実習委員会委員として、保育士養成課程における保育実習（施設実習）に関する養成校間の調整や実習先施設との連絡に関する会議に出席した。
48.岡山県大学人権・同和教育懇談会　委員	2009年4月～2010年3月	岡山県大学人権・同和教育懇談会の委員として、岡山学院大学・岡山短期大学の人権・同和教育への取組を推進した。また、懇談会に参加し、岡山学院大学・岡山短期大学の人権・同和教育への取組状況の報告をするとともに、各大学との意見交換を行った。
49.筑波大学生命環境科学等支援室　技術補佐員	2005年4月～2006年3月	技術補佐員として、日本語・日本文化学類のコンピュータ実習室の管理を行った。具体的には、サーバ（Red Hat Enterprise Linux）の管理と、バックアップ、アカウント管理、各端末とプリンタの保守を行った。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.コミュニケーション	共	2023年3月	ナカニシヤ出版	【共著者】岡本真一郎（編）、木村昌紀、竹中一平、他

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
の社会心理学ー伝える・関わる・動かすー		30日		【担当部分】全文218頁中16頁、第3章1節「噂」（139-154頁） 【概要】噂の定義を紹介し、噂の発生と伝播、伝播に伴う内容の変化、広範囲に流布することによる社会的影響について解説した。
2.集団と社会の心理学	共	2023年3月25日	サイエンス社	【共著者】笹山郁生（編）、真島理恵、竹中一平、他 【担当部分】全文309頁中26頁、第9章「流行とうわさ」（181-206頁） 【概要】流行とうわさについて、集合行動について紹介し、その一つとしての流行とうわさについて概説し、社会的ネットワークと情報伝播について説明した。
3.社会に切りこむ心理学－データ化が照らし出す社会現象－	共	2019年2月10日	サイエンス社	【共著者】松井豊(監修)、高橋尚也・宇井美代子・畑中美穂(編)、市村美帆、小浜駿、小城英子、竹中一平、他 【担当部分】全文247頁中2頁、コラム1　古くて新しいうわさ(60-61頁) 【概要】平成30年7月豪雨に際して発生したうわさを題材とし、うわさの伝達・伝播について解説する内容であった。
4.スタンダード自己心理学・パーソナリティ心理学	共	2015年11月10日	サイエンス社	【共著者】松井豊・櫻井茂男(編)、今野裕之、竹中一平、他 【担当部分】全文265頁中32頁、第2章「パーソナリティの諸理論」(15-35頁)、第7章扉文・7.1～7.4「友人関係・恋愛と自己・パーソナリティ」(118-128頁) 【概要】第2章：パーソナリティについて、その定義を紹介し、代表的な理論である類型論・特性論・相互作用論についてそれぞれ解説した。第7章：友人関係における自己とパーソナリティとの関わりについて解説した。
5.質問紙調査と心理測定尺度	共	2014年7月10日	サイエンス社	【共著者】宮本聡介・宇井美代子(編)、大石千歳、高橋尚也、竹中一平、他 【担当部分】全文323頁中29頁、第7章「データの整理」(122-150頁) 【概要】質問紙調査において、質問紙を回収してからデータを入力し、得られたデータの単純集計を行うまでの一連の過程について解説した。特に、ExcelやSPSSの活用を念頭に置き、それらのソフトウェアの具体的な使用方法も踏まえて解説を行っている。
6.ジャーナリストの惨事ストレス	共	2011年12月12日	現代人文社	【共著者】報道人ストレス研究会(編著)、佐藤広英、高橋尚也、竹中一平、他 【担当部分】全文167頁中10頁、第1章2節 「東日本大震災におけるホームページ活動」(7-9,11-17頁) 【概要】報道人ストレス研究会のホームページにおいて、東日本大震災に際して公開したページ（現地で活動している災害救援者やジャーナリスト、ボランティアに対する惨事ストレスの概要およびその予防法・対応法を紹介する内容）の概要およびそのアクセス数の推移についてまとめた。
2 学位論文				
1.大学生の日常会話におけるうわさの伝達	単	2007年3月23日	博士論文（筑波大学）	大学生の日常会話において話されるうわさを対象とし、計７つの実証研究を行った。うわさの類型を導出し、各下位類型の特徴を、伝達経路やうわさが話される集団の集団特性の点から明らかにした。そして、うわさの伝達に関する個人内過程を意思決定過程の観点から検討し、モデルを構築した。
3 学術論文				
1.線の描画による回想データの数値化の試み（査読付き）	共	2020年3月31日	武庫川女子大学紀要，67，61-69	【担当部分】データ分析・論文執筆(全頁担当) 【共著者】竹中一平・鈴木高志・太幡直也 【概要】本研究では、時間的変動を含む心理変数の回想データを測定する手法として、これまでに開発されてきたいくつかの手法の特徴と問題点について述べた上で、それらの手法のデータ化に関する問題点の改善を試みる手法である “Secline 方式（Searching continuous line method）” を提案した。
2.情報システムにおけるデータベースの仕組みを学ぶ共通教科「情報」の授業の開発と評価（査読付）	共	2019年10月	情報処理学会論文誌（教育とコンピュータ），5(3)，23-34	【担当部分】データ分析、分析に関わる内容の執筆 【共著者】白井詩沙香・長瀧寛之・竹中一平・武本康宏・田邊則彦・兼宗進 【概要】本研究では高等学校共通教科 「情報」 の授業としてデータベースから抽出したデータをどのように情報システムで利用して

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				いるのかを学習する授業を設計した。授業では、はじめに図書館データベースを題材としたマンガ教材を読んだ後、データベース学習ツール sAccess の図書館データベースを利用して選択・射影などデータベースの基本操作を学習した。続いて、図書検索システム体験ツールを使い、生徒自身でこれまでに学んだデータベース問い合わせ処理を使い、独自の検索システムを構築した。
3.データベース導入学習のためのマンガ教材の開発と評価（査読付）	共	2018年12月	日本教育工学会論文誌,42,109-112.	【担当部分】データ分析・論文執筆(方法・結果担当) 【共著者名】白井 詩沙香・竹中 一平・長瀧 寛之・兼宗 進 【概要】高等学校共通教科「情報」におけるデータベース教育導入時の補助教材としてマンガ教材を開発し、その効果を検証した。開発したマンガ教材、小説風教材、従来の教科書を用いた比較検証実験を行なった結果、主観的満足度において高い結果が得られ、導入学習時の学習動機づけの促進に有用であることが示唆された。
4.違法・有害情報対策従事者の職務ストレスの実態とその関連要因（査読付）	共	2018年3月	社会心理学研究,33(3),135-148	【担当部分】データ分析・論文執筆(全頁担当) 【共著者名】竹中一平・落合萌子・松井豊 【概要】日本における違法・有害情報対策従事者の精神的被害の現状とその関連要因を明らかにした。違法・有害情報対策を行っている企業に勤務する160名を対象に調査を行った。回答者全体のうち、IES-Rのハイリスク群は10.4%であり、GHQ-12のハイリスク群は47.0%であった。これらの結果から、違法・有害情報対策従事者の精神的被害は消防職員やジャーナリストに匹敵するものであると推定された。
5.データベースと情報システムを学習する授業の提案と実践（査読付）	共	2017年10月19日	情報処理学会論文誌「教育とコンピュータ」，3(3)，18-28.	【担当部分】データ分析・論文執筆(「4.教育実践による評価」23-26頁担当) 【共著者名】兼宗進・白井詩沙香・竹中一平・長瀧寛之・小林史弥・島袋舞子・田邊則彦 【概要】本研究では、高等学校での情報教育におけるデータベースや情報システムの仕組みの体験的な学習の実現を目指し、データベース操作とデータベースを活用したプログラム体験実習を通して情報システムの仕組みを学習する授業シナリオを設計した。高等学校で教育実践を行い、各時限および授業全体についての満足度、難易度および理解度を分析した結果、授業内容はやや難しかったものの、総じて満足度は高く、学習目標を達成できていることが分かった。
6.研究倫理審査システムの開発と評価（査読付）	共	2017年3月31日	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編）,64,41-49	【担当部分】データ分析・論文執筆(全頁担当) 【共著者名】竹中一平・松村憲一・半羽利美佳・玉木健弘・長岡雅美 【概要】研究倫理審査に関する事務処理を軽減し、円滑な申請・審査を行うために研究倫理審査の電子申請・審査システムを構築し、その評価を行った。当システムは、申請書の提出や利用者への連絡等、研究倫理審査に関する事務処理の多くを自動化し、研究倫理審査に関わる情報を一元化した。さらに、利用者にとって使い勝手の良いものにするために、必要な情報のみに絞った画面提示の制御や審査項目の入力可否の制御がなされた。
7.学科コンピュータ室の利用状況分析	単	2015年7月31日	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要,23,31-34.	心理・社会福祉学科（大学）、心理・人間関係学科及び人間関係学科（短大）の学生が利用する学科コンピュータ室の利用実態を、。2014 年度の利用開始日から利用終了日までの期間のログイン履歴を収集し、得られたデータを分析することで報告した。
8.類型別にみたうわさの伝達に関連する要因―内容属性と機能の評価からのアプローチ―（査読付）	単	2014年3月31日	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学），61，43-52.	大学生が日常会話で話すうわさを対象とし、類型別にうわさの伝達に関連する要因を明らかにすることを目的とした。先行研究において扱われてきた要因を、内容属性評価と機能の評価の側面から捉え直し、それぞれがうわさの伝達に関連するかどうかを質問紙調査によって検討した。分析の結果、類型によって関連する要因はやや異なるものの、一貫して機能の評価がうわさの伝達と強く関連することが示された。
9.急性ストレスが選択的注意に及ぼす影響（査読付）	共	2012年9月	基礎心理学研究,31(1)，42-56	【担当部分】論文執筆 【共著者名】竹中一平・河原純一郎・熊田孝恒 【概要】急性ストレスが選択的注意に及ぼす影響を検討した。実証研究を概観し、物理的ストレスでは選択性が向上する場合もある一

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				方、心理社会的ストレスに関しては選択性が低下することを明らかにし、知覚的負荷と急性ストレスが交互作用を示すことから、両者は共通の認知資源を消費することが示唆された。
10.The effects of acute stress and perceptual load on distractor interference(査読付)	共	2012年9月	Quarterly Journal of Experimental Psychology, 65 (4), 617-623	【担当部分】研究実施、データ解析、論文執筆（該当頁の抽出は不可能） 【共著者名】Sato, H., Takenaka, I., & Kawahara, J. 【概要】知覚負荷と急性ストレスが共通の注意資源を消費するのかどうかを検討した。フランカ課題を用いた実験の結果、知覚負荷または急性ストレスのいずれか一方が高いときには注意資源が一定程度消費され、その結果として注意の選択性が向上する一方で、両者が高いときには注意資源が枯渇するために選択性が悪化することが示された。
11.「うわさ学」の現在	単	2009年3月25日	Mobile Society Review 未来心理, 15巻, 50-59	うわさの伝達に関する実証研究を、対人コミュニケーションによる情報伝達の視点からレビューした。また、うわさの伝達を「伝達意図による伝達」と「確認意図による伝達」の2種類の伝達形態に分ける視点について紹介し、実証研究の内容を解説した。
12.人から人へ伝わる情報―うわさの対人心理学―	単	2008年7月25日	繊維製品消費科学, 49巻7号, 39-48	これまでのうわさ研究を概観し、うわさの伝播を明らかにしようとする研究を、集団レベルからのアプローチ、個人内レベルからのアプローチ、個人と個人との相互作用のレベルからのアプローチの３側面から整理した。そして、個人と個人との相互作用のレベルから検討した研究に関して、その内容を紹介した。
13.家庭内の防災行動に関する研究 ： 東京と神戸の一般住民間における比較	共	2008年3月31日	昭和女子大学生活心理研究所紀要, 10巻, 13-21	【担当部分】調査の実施を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【共著者名】清水裕・西道実・堀洋元・松井豊・元吉忠寛・竹中一平・他4名 【概要】家庭内における防災行動に関して、東京と神戸の一般住民間で比較した。分析の結果、全体として神戸の方が生命に直接関わる対策を積極的に行っていたのに対して、東京では、大地震の発生を心配はしていても、具体的な行動レベルでは準備等行われていないことが明らかになった。
14.大学生の日常会話におけるうわさの類型化(査読付)	単	2007年9月25日	心理学研究, 78巻4号, 433-440	大学生の日常会話で話されるうわさの類型化を目的とし、うわさの内容属性と機能の評価の観点から、うわさと日常的な話題の類似点や相違点を比較し、両者の構造を検討した。研究１では、面白さや不安喚起など７内容属性と、娯楽機能や情報提供機能など４機能を用い、研究２では、面白さ、確実性、不安喚起の３内容属性を用いて、「日常話題型」「面白さ型」「不安喚起型」「怖いもの見たさ型」の４類型を抽出した。
15.大学生の日常会話におけるうわさの類型化―内容属性の評価の観点から―(査読付)	共	2007年8月17日	筑波大学心理学研究, 34巻, 55-64	【担当部分】研究立案、データ解析、論文執筆（全頁） 【共著者名】竹中一平・松井 豊 【概要】うわさの内容に関する“面白さ”“確実性”“不安喚起”の評価の観点から、大学生の日常会話におけるうわさを類型化した。４大学において質問紙調査を行った結果、面白さが高く確実性が低い「非日常娯楽型」、面白さが低く不安喚起が高い「非日常不安型」、面白さと確実性が高い「日常型」の３類型のうわさが見出された。
16.新潟中越地震後の避難所の研究	共	2007年1月26日	尚絅学院大学紀要, 54巻, 63-76	【担当部分】新潟での調査および調査担当地区に関する報告書の執筆を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【共著者名】水田恵三・堀洋元・西道実・松井豊・竹中一平・他3名 【概要】2004年10月に発生した新潟中越地震後に、長岡市と小千谷市周辺を中心に現地の15の避難所を訪れ、運営の担当者に面接調査を行い、その後郵送による追跡調査を行った。調査では、避難所の状況や運営方法、問題点などを尋ね、その結果を事例報告という形でまとめた。
17.対人コミュニケーションの観点からみたうわさの伝達(査読付)	単	2005年11月30日	社会心理学研究, 21巻2号, 102-115	大学生の日常会話におけるうわさを対象とし、対人コミュニケーションの観点から、接触・伝達率、日常的な話題との関連、伝達に及ぼす要因を検討した。分析の結果、うわさの伝達には、会話相手との話題の共有といった対人コミュニケーションが影響することが明らかにされた。さらに、日常会話におけるうわさは、日常的な話

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				題が乏しいときに話題の少なさを補う機能を持つことが示唆された。
18.広域災害における避難所運営訓練システムの構築と防災教育の効果に関する実験的研究（査読付）	共	2005年11月	地域安全学会論文集，7，425-432	【担当部分】STEP Ver5.0の開発、大学生を対象とした調査の実施およびデータ解析の一部を担当したが、論文中での抽出は不可能 【共著者名】元吉忠寛・松井豊・竹中一平・他7名 【概要】広域災害後の避難所運営訓練システム（STEP）のVer 0.5の開発過程について解説するとともに、被災経験のある神戸市住民と被災経験のない大学生を対象とした効果検証を行った。分析の結果、STEPは神戸市住民、大学生ともに「興味深かった」「学ぶことが多かった」という評価が高く、防災教育に有益であることが示唆された。
19.広域災害における避難所運営訓練システム(STEP)の開発過程と効果検証(査読付)	共	2005年9月1日	筑波大学心理学研究，30，43-49	【担当部分】STEP Ver5.0の開発、開発過程に関する内容の執筆（48-49頁担当） 【共著者名】松井豊・竹中一平・他8名 【概要】近年、広域災害に対する防災対策として地域住民の意識や行動等のソフト面の充実が重視されている。そこで、地域住民、特に若い世代の防災意識を高めるツールとして、広域災害後の避難所運営訓練システムを開発した。本論文では、大学生を対象としたSTEP Ver4.0の効果検証と、それに基づいて作成したVer5.0の開発過程をまとめた。
20.日常会話におけるうわさと話題の比較－属性と機能の観点からの検討－(査読付)	共	2005年9月1日	筑波大学心理学研究，30，33-42	【担当部分】研究立案、データ解析、論文執筆（全頁担当） 【共著者名】竹中一平・松井 豊 【概要】大学生の日常会話において話される様々なうわさや日常的な話題に注目し、その内容を、面白さや曖昧性、不安喚起といった内容属性の評価と、娯楽機能や情報提供機能といった機能の評価の観点から比較した。その結果、日常的な話題と比較したうわさの特徴として、曖昧性が高く面白い内容であることと、不安喚起が高い内容であることが見出された。
21.青年期の友人関係研究の展望－1985年以降の研究を対象として－(査読付)	共	2004年9月1日	筑波大学心理学研究,28,55-67	【担当部分】論文執筆(全頁担当) 【共著者名】落合良行・竹中一平 【概要】1985年から2003年までの青年の友人関係に関する研究を概観し、青年期の友人関係研究がどのように展開してきたのかを、友人関係の構造に関する研究、友人関係の構造と様々な要因との関連研究、友人関係の発達的変化に関する研究の３つの観点に分けて論じた。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.パッケージデザインに関わるメディア・リテラシー育成授業の実践	共	2018年9月28日	日本教育工学会 第34回全国大会	【共同発表者】白井詩沙香・津田井美香・竹中一平・森本真・井上雅人 【担当部分】データ分析、分析に関わる内容の執筆 【概要】本研究では、デザインを学ぶ大学1年生を対象にパッケージデザインに関わるメディア・リテラシーを育成するための授業を開発、実践し、その効果について検討した。授業では、パッケージデザインに関わるメディア・リテラシーの講義およびパッケージデザインの読み取り演習を行い、最終課題としてヘアケア製品ボトルのラベルデザイン制作を行った。
2.情報システムにおけるデータベースの仕組みを学ぶ共通教科「情報」授業の提案と実践	共	2018年3月17日	情報処理学会コンピュータと教育研究会144回研究発表会	【共同発表者】白井詩沙香・長瀧寛之・竹中一平・武本康宏・田邊則彦・兼宗進 【担当部分】データ分析、分析に関わる内容の執筆 【概要】本研究では高等学校共通教科 「情報」 の授業としてデータベースから抽出したデータをどのように情報システムで利用しているのかを学習する授業を設計した。授業では、はじめに図書館データベースを題材としたマンガ教材を読んだ後、データベース学習ツール sAccess の図書館データベースを利用して選択・射影などデータベースの基本操作を学習した。続いて、図書検索システム体験ツールを使い、生徒自身でこれまでに学んだデータベース問い合わせ処理を使い、独自の検索システムを構築した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
3.データベース教育におけるマンガ教材の開発と提案	共	2017年7月2日	日本情報科教育学会 第10回全国大会	【共同発表者】白井 詩沙香・竹中 一平・長瀧 寛之・兼宗 進 【担当部分】データ分析、分析に関わる内容の執筆 【概要】データベースは情報システムの基盤技術であり、情報科学教育において重要な学習項目である。本研究の目的は、補助教材としてマンガ教材を開発し、データベース学習を支援することである。本稿では、開発したマンガ教材・小説教材・従来の教科書の比較実験の結果について報告する。
4.Measurement of dynamic changes in depressive state by drawing lines	共	2016年7月28日	31st International Congress of Psychology	【掲載ページ】262 【共同発表者】TAKENAKA, I., TABATA, N., & SUZUKI, T. 【担当部分】研究実施、論文の執筆 【概要】Secline方式を用いて、定期試験前後の抑うつ状態を測定し、楽観主義傾向が抑うつ状態の変動に影響するかどうかを検討した。得られた曲線をクラスタ分析によって分類し、各クラスタによって抑うつの程度が異なることを示した。そして、判別分析によって、楽観主義傾向の程度が各クラスタへの分類を予測できることを明らかにした。
5.データベースを利用した高校におけるプログラミング授業の実践と評価	共	2016年3月5日	情報処理学会コンピュータと教育研究会134回研究発表会	【共同発表者】兼宗進・白井詩沙香・竹中一平・長瀧寛之・島袋舞子・田邊則彦 【担当部分】データ分析、分析に関わる内容の執筆 【概要】本研究では、プログラミング教育を通して情報システムのイメージを体験的に学ぶことを目的とし、高等学校共通教科情報を想定して、データベースを題材としたプログラミングの授業を設計した。本発表では、実際に高等学校で実践した本プログラミング授業の内容を紹介し、本授業評価として収集した授業アンケートの分析結果について報告した。
6.Secline方式―線の回想的描画による心理変数のデータ化の試み(3)	共	2015年9月23日	日本心理学会第79回大会	【演題番号】2AM-002 【共同発表者】竹中一平・鈴木高志・太幡直也 【担当部分】研究計画の立案および調査の実施、論文の執筆 【概要】線の回想的描画によって心理変数をデータ化する方法である“Secline方式”について、測定手法の妥当性を再検討するために、従来用いられている評定法による測定値とSecline方式による測定値とを比較した。分析の結果、両手法による測定値はほぼ一致することが示されたことから、Secline方式の妥当性が再確認された。
7.保育実習におけるストレス反応の変動―ネガティブな反芻と楽観主義傾向がストレス反応とその変動に及ぼす影響―	共	2013年11月2日	日本社会心理学会第54回大会	【共同発表者】竹中一平・原奈津子・鈴木高志・太幡直也 【担当部分】研究計画の立案および調査の実施、論文の執筆 【概要】保育実習生が実習期間に感じるストレスについて、ネガティブな反すうと楽観主義傾向が、ストレス反応とその変動の程度に影響するかどうかを検討した。調査の結果、ネガティブな反すうはストレス反応の変動に影響し、楽観主義傾向はストレス反応自体に影響することが明らかにされた。
8.保育実習生にとって実習期間のいつがストレスフルなのか？－Secline方式による回想データを用いた検討－	共	2012年11月10日	日本青年心理学会第20回大会	【共同発表者】竹中一平・原奈津子 【概要】保育実習期間中の心理的ストレス反応の変化を、Secline方式および日誌法によって測定し、実習生にとって実習期間のどの時期がストレスフルなのかを明らかにした。
9.保育実習生のストレス反応と曖昧さへの態度との関連	共	2012年9月13日	日本心理学会第76回大会	【演題番号】3PMD09 【共同発表者】竹中一平・原奈津子 【担当部分】研究計画の立案および調査の実施、論文の執筆 【概要】保育実習生が実習期間に感じるストレスについて、線を描画することで心理状態の変化を測定するSecline方式を用いて検討した。調査の結果、実習の前半では曖昧さ耐性が低い学生のストレス反応が高く、実習の後半では自尊感情が高い学生のストレス反応が低いことが示された。
10.東日本大震災に関するうわさの伝達	単	2011年9月19日	日本社会心理学会第52回大会	【掲載ページ】393 【概要】2011年3月11日の東日本大震災発災以降の曖昧さと不安の強い状況下におけるうわさの伝達を検討した。宮城県の大学生を対象とした質問紙調査を行った結果、従来の研究とは異なり、曖昧さの高い内容のうわさは積極的な伝達や確認行動を抑制することを示し

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				た。
11.ストレスと知覚負荷が選択的注意に与える影響	共	2010年11月	日本基礎心理学会第29回大会	【掲載ページ】78 【共同発表者】佐藤広英・竹中一平・河原純一郎 【担当部分】研究・実験計画の立案および実験の実施 【概要】ストレスと知覚負荷が選択的注意に及ぼす影響について、フランカ干渉課題を用いて検討した。ストレス刺激として、Trier Social Stress Testを用いた結果、ストレスと知覚負荷を同時に高めた場合、選択的注意が損なわれることを明らかにした。
12.新型インフルエンザに関するうわさの伝播	共	2010年9月	日本社会心理学会第51回大会	【掲載ページ】130-131 【共同発表者】竹中一平・田中優他 【担当箇所】研究実施、発表 【概要】感染状況の異なる4地域において新型インフルエンザに関するうわさを収集し、うわさとの接触と感染状況との関係を検討した。
13.Secline: A new technique for assessing retrospective changes in psychological status from line drawings.	共	2010年7月	27th International Congress of Applied Psychology	【掲載ページ】1567 【共同発表者】SUZUKI, T., TABATA, N., TAKENAKA, I., etc. 【担当部分】研究実施・調査 【概要】Secline方式を用いて、定期試験前後の抑うつ状態を測定し、Secline方式の信頼性・妥当性を確認した。その結果、リッカート法による測定と同程度の水準で、一定期間内の抑うつ状態の変化を把握することが可能であることが示された。
14.ストレスは注意資源を消費するのか?	共	2009年12月5日	日本基礎心理学会第28回大会	【掲載ページ】69 【共同発表者】竹中一平・佐藤広英・河原純一郎・熊田孝恒 【担当部分】研究計画の立案および実験の実施、論文の執筆 【概要】ストレスが注意の選択性に対して及ぼす影響についてフランカ干渉課題を用いて検討した。その結果、知覚負荷の程度に関わらず抗ストレス群の方が干渉効果が強かったことから、ストレスは注意資源を消費することが示された。
15.「イチロー3,085安打で日本記録に並ぶ」ニュースの伝播過程	単	2009年10月11日	日本社会心理学会第50回大会	【掲載ページ】688-689 【概要】2009年4月16日(木)に報道された「イチローが3,085安打で日本記録に並ぶ！」ニュースについて、その伝播過程を接触および伝達メディアの観点から検討し、接触日によってメディアが変化することを明らかにした。
16.Secline方式－線の回想的描画による心理変数のデータ化の試み(1)	共	2009年8月27日	日本心理学会第73回大会	【掲載ページ】206 【共同発表者】鈴木高志・藤桂・伊藤正哉・太幡直也・竹中一平・櫻井茂男 【担当部分】研究・調査計画の立案および論文執筆の一部 【概要】個人内の心理状態の時系列的変化について、回想・描画を求めることによってデータ化する「Secline方式（Searching continuous line method）」の手法の提案および測定法としての信頼性の検証を行った。
17.Secline方式－線の回想的描画による心理変数のデータ化の試み(2)	共	2009年8月27日	日本心理学会第73回大会	【掲載ページ】207 【共同発表者】竹中一平・藤桂・伊藤正哉・鈴木高志・太幡直也 【担当部分】論文執筆 【概要】連続発表である「Secline方式－線の回想的描画による心理変数のデータ化の試み(1)」において提案されたSecline方式について、測定手法の妥当性を検討した。本研究でSecline方式によって測定したK6尺度と関連することが予測される反芻尺度および楽観主義尺度との関連を検討し、妥当性の検証を行った。
18.地域防災リーダー養成プログラムの開発に関する研究（１）仮想訓練システム(STEP: Simulation Training of Earthquake Shelter Program)を実施する際の課題（１）	共	2009年8月27日	日本心理学会第73回大会	【掲載ページ】165 【共同発表者】西道実・清水裕・松井豊・田中優・福岡欣治・元吉忠寛・水田恵三・堀洋元・竹中一平 【担当部分】仮想訓練システムの作成 【概要】地域防災の主役である住民を直接的に支援し、震災に対して主体的に取り組むことのできる地域防災リーダーを養成するプログラムの開発に向けて、大規模災害時の仮想訓練システム(STEP)の改訂を実施するための研究の一環として、現状のSTEPの課題を整理し、問題点を拾い上げた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
19.日常会話におけるうわさの伝達―対人コミュニケーションの観点から―	単	2009年8月	日本心理学会第73回大会	【掲載ページ】(80) 【概要】大学生の日常会話で話されるうわさを対象とした７つの実証研究の結果に基づき、対人コミュニケーションの観点から、うわさの伝達に関する個人内過程をモデル化した。そして、作成したモデルの各段階において評価される要因を、うわさの類型ごとに整理し、うわさの伝達に関する意思決定のルートについて論じた。
20.世代別にみた都市伝説との接触経験	単	2008年9月20日	日本心理学会第72回大会	【掲載ページ】190 【概要】近年マスメディアにおいて取り上げられることが増加してきた「都市伝説」について、直近3ヶ月以内の接触経験率や接触メディアの種類を、10代、20代、30代以上の3群で比較した。分析の結果、どの世代も概ね50％程度の接触経験率であり、その内容も似通っていることが明らかにされた。
21.地域防災力の向上に関する研究（６）―家庭内での防災活動を規定する要因：東京調査から―	共	2007年9月24日	日本社会心理学会第48回大会	【掲載ページ】764-765 【共同発表者】堀洋元・元吉忠寛・清水裕・西道実・松井豊・水田恵三・福岡欣治・竹中一平・田中優・新井洋輔 【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために行った神戸市での調査と東京都内での調査の結果を比較し、震災を経験したことはないものの、大規模な地震が想定されている地域である東京都区部の特性の観点から、その結果を考察した。
22.広域災害における避難所運営訓練システムの開発(３)	共	2007年9月18日	日本心理学会第71回大会	【掲載ページ】143 【共同発表者】竹中一平・西道実・清水裕・堀洋元・水田恵三・松井豊・田中優・福岡欣治・新井洋輔・元吉忠寛 【担当部分】論文執筆（全頁） 【概要】これまでに開発してきた広域災害後の避難所運営に関するシミュレーションプログラム(STEP Ver5.0)の効果と有効性について検討することを目的とし、被災経験のある神戸市民12名、被災経験のない大学生102名および防災関係者192名にSTEPを実施し、本プログラムが実際の避難所での経験に即しており、一定程度の一般性を持つプログラムであることが推定された。
23.新潟中越地震後の避難所の研究（４）―地域の紐帯を中心として―	共	2007年9月18日	日本心理学会第71回大会	【掲載ページ】152 【共同発表者】水田恵三・松井豊・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・堀洋元・元吉忠寛・新井洋輔・竹中一平 【担当部分】新潟での調査および調査担当地区に関する報告書の執筆を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】新潟中越地震における避難所の運営に関するフィールド調査を行ったいくつかの避難所のリーダーに対して追跡調査を行い、その結果を地域住民の結びつきの点から考察した。
24.家庭内防災力の向上に関する研究（５）―家庭での防災行動を規定する要因：神戸調査から―	共	2007年9月18日	日本心理学会第71回大会	【掲載ページ】132 【共同発表者】元吉忠寛・西道実・福岡欣治・水田恵三・竹中一平・清水裕・堀洋元・松井豊・新井洋輔・田中優 【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために行った神戸市での調査と東京都内での調査の結果を比較し、震災を経験した住民の多い神戸市の特性の観点からその結果を考察した。
25.類型論の観点からみたうわさの伝達に影響を与える要因	単	2007年9月	日本社会心理学会第48回大会	【掲載ページ】118-119 【概要】竹中・松井（2007）におけるうわさの３類型理論に基づいてうわさを分類し、各類型のうわさの伝達に影響する要因を明らかにするために質問紙調査を行った。４大学における調査の結果、類型によってうわさ内容の伝達意図や確認意図、伝達経験に影響する要因が異なることが明らかにされた。
26.伝達形態別にみたうわさの伝達に影響する要因	単	2007年9月	日本社会情報学会JSIS第12回大会	【掲載ページ】242-247 【概要】大学生の日常会話におけるうわさを対象とし、内容属性と機能の評価が、うわさの伝達意図と確認意図に及ぼす影響について検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、伝達意図と確認意図それぞれに対して影響するうわさの内容属性や機能が異なるこ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				とが明らかにされた。うわさの伝播には、積極的に内容を話そうとする伝達意図による伝播と、情報内容を尋ねようとする確認意図による伝播の２形態が存在することが示唆された。
27.家庭内防災力の向上に関する研究（２）―家庭内防災意識を規定する要因：神戸調査から―	共	2007年6月16日	日本グループダイナミックス学会第54回大会	【掲載ページ】186-187 【共同発表者】福岡欣治・西道実・元吉忠寛・水田恵三・竹中一平・清水裕・堀洋元・松井豊・新井洋輔・田中優 【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために、神戸市におけるサンプリング調査を通して、防災意識と防災行動との関連を検討した。本発表では、家庭内防災意識を規定する要因に関する分析結果の報告を行った。
28.家庭内防災力の向上に関する研究（３）―研究目的と東京都内での調査―	共	2007年6月16日	日本グループダイナミックス学会第54回大会	【掲載ページ】188-189 【共同発表者】清水裕・西道実・堀洋元・松井豊・元吉忠寛・竹中一平・新井洋輔・田中優・水田恵三・福岡欣治 【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために、東京都内におけるサンプリング調査を通して、防災意識と防災行動との関連を検討した。本発表では、研究目的と基礎データの報告を行った。
29.家庭内防災力の向上に関する研究（４）―家庭内防災意識を規定する要因：東京調査から―	共	2007年6月16日	日本グループダイナミックス学会第54回大会	【掲載ページ】190-191 【共同発表者】田中優・清水裕・水田恵三・西道実・竹中一平・堀洋元・元吉忠寛・福岡欣治・松井豊・新井洋輔 【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために、東京都内におけるサンプリング調査を通して、防災意識と防災行動との関連を検討した。本発表では、家庭内防災意識を規定する要因に関する分析結果の報告を行った。
30.東京都区部における地域自主防災組織の活動事例	共	2006年11月	日本心理学会第70回大会	【掲載ページ】157 【共同発表者】清水裕・松井豊・西道実・田中優・新井洋輔・竹中一平・福岡欣治・堀洋元・水田恵三・元吉忠寛 【担当部分】調査実施の一部を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】2006年において積極的な防災活動を実施している東京都区部の2つの自主防災組織を対象に、地域の特徴や自主防災組織の組織化の経緯、現在の活動状況や発生している問題等に関して尋ねる面接調査を実施し、その結果を報告した。
31.家庭内防災力の向上に関する研究（１）－研究目的と神戸市での調査－	共	2006年9月	日本社会心理学会第47回大会	【掲載ページ】770-771 【共同発表者】西道実・松井豊・新井洋輔・竹中一平・清水裕・水田恵三・元吉忠寛・福岡欣治・田中優・堀洋元 【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために、神戸市におけるサンプリング調査を通して、防災意識と防災行動との関連を検討した。本発表では、研究目的と基礎データの報告を行った。
32.地域自主防災組織住民の防災意識	共	2006年9月	日本社会心理学会第47回大会	【掲載ページ】766-767 【共同発表者】新井洋輔・元吉忠寛・松井豊・西道実・清水裕・竹中一平・田中優・福岡欣治・堀洋元・水田恵三 【担当部分】調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】自主防災組織に所属する住民を対象とし、学生の防災意識との比較との比較を通して、防災意識尺度と災害感の関連を検討した。その結果、防災組織住民の防災意識の高さが示され、防災意識が高く防災対策を行っている人ほど、災害は運命であると受け入れながらも工夫によって乗り越えられると考えることが明らかにされた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
33.大学生における友人の機能と行動が関係継続意図に与える影響－HI友人/LI友人アプローチに基づいて－	単	2006年9月	日本社会心理学会第47回大会	【掲載ページ】704-705 【概要】普段から良く会う接触頻度の高い友人（HI友人）と、地元に帰ったときだけに会うような接触頻度の低い友人（LI友人）について、それぞれの友人に期待する機能や友人に対して取る行動が、友人関係の継続意図に対して与える影響について検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、HI友人は具体的なサポートがあるほど、LI友人は過去の経験を共有していると思っているほど関係継続意図が高いことが明らかになった。
34.防災意識尺度作成の試み	共	2005年9月	日本社会心理学会第46回大会	【掲載ページ】702-703 【共同発表者】新井洋輔・元吉忠寛・松井豊・西道実・清水裕・竹中一平・田中優・福岡欣治・堀洋元・水田恵三 【担当部分】調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】防災意識の高さを捉える指標として、地震や水害などの災害に対する準備が行われている程度を測定する尺度を開発し、学生および防災関係者に対して実施し、尺度の妥当性および信頼性について検証した。
35.新潟中越地震における避難所の事例研究（２）	共	2005年9月	日本社会心理学会第46回大会	【掲載ページ】700-701 【共同発表者】堀洋元・西道実・清水裕・松井豊・竹中一平・新井洋輔・元吉忠寛・田中優・福岡欣治・水田恵三 【担当部分】新潟での調査と担当地区に関する報告書の執筆を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】新潟中越地震における避難所の運営に関するフィールド調査の事例報告を行った。本発表では、小千谷市を中心とした7つの避難所について運営方法や避難所となった学校との連携について尋ねた。
36.新潟中越地震における避難所の事例研究（１）	共	2005年9月	日本社会心理学会第46回大会	【掲載ページ】698-699 【共同発表者】西道実・堀洋元・清水裕・松井豊・新井洋輔・竹中一平・元吉忠寛・田中優・福岡欣治・水田恵三 【担当部分】新潟での調査と担当地区に関する報告書の執筆を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】新潟中越地震における避難所の運営に関するフィールド調査の事例報告を行った。本発表では、小千谷市の北部地域における5つの避難所について運営方法や避難所となった学校との連携等について尋ねた。
37.広域災害における避難所運営訓練システムの開発（２）	共	2005年9月	日本心理学会第69回大会	【掲載ページ】218 【共同発表者】元吉忠寛・松井豊・新井洋輔・竹中一平・水田恵三・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・堀洋元 【担当部分】システム開発および調査の実施を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】広域災害後の避難所運営訓練システム（STEP）の開発過程を報告した。Ver0.5を大学生と被災経験のある神戸住民に実施し、プログラムの効果と有用性について質問紙調査によってフィードバックを得た。その結果、参加者の評価は学生よりも神戸住民の方が高く、プログラムの有効性やリアリティが確認された。
38.大学新入生が話題にするうわさの時期的再帰性－大学新入生への３年間の反復調査による検討	単	2005年9月	日本心理学会第69回大会	【掲載ページ】72 【概要】　うわさの「時期的再帰性」について検討するために、大学生集団において会話されるうわさ内容の変化について、３年間の調査結果を再分析した。分析の結果、大学新入生の間では、年度によって話されるうわさの主要な内容が変化していることや、入学直後の時期に多く話されることが明らかにされた。
39.うわさの伝達に関する意思決定過程－情報内容の評価の観点からの検討－	単	2005年9月	日本社会心理学会第46回大会	【掲載ページ】164-165 【概要】うわさと接触した際の情報内容の認知処理について、面白さ、不安喚起、重要性、確実性の４つの内容属性の評価の観点から検討した。大学生を対象とした質問紙実験を行い、分散分析によって情報内容の認知処理の順序性について解析した。その結果、うわさと接触した後、まず重要性の判断が行われ、重要性が低い場合は不安喚起の判断が、そして不安喚起が低い場合には面白さの判断が行われるという順序性が推定された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
40.うわさと話題の接触率と会話相手との親密度－大学別にみたうわさと話題－	単	2004年9月	日本心理学会第68回大会	【掲載ページ】198 【概要】うわさが多く話される集団の集団特性を明らかにするために、異なる集団特性をもつ３大学において調査を行った。日常的な話題との接触率や、会話相手との親密度について大学別に比較した結果、全体的に会話相手と親しく、日常的な話題も多く話している大学において、うわさも多く話されていた。したがって、集団成員の普段からの会話率や仲の良さが、うわさとの接触にも影響することが推測された。
41.日常会話におけるうわさと話題の構造（２）	単	2004年7月	日本社会心理学会第45回大会	【掲載ページ】250-251 【概要】大学生が日常会話で話すうわさと日常的な話題を比較した竹中（2003）の知見を一般化すること、およびうわさと日常的な話題をより簡便に分離することを目指して、３大学において調査を行った。面白さ、確実性、不安喚起の３つの内容属性の評価を用いて、うわさと日常的な話題を比較し、竹中（2003）と同様の構造を得た。
42.時期による話題の変化と会話相手への親密度－大学新入生のうわさと話題－	単	2003年9月	日本心理学会第67回大会	【掲載ページ】147 【概要】大学新入生が会話するうわさや日常的な話題の時期による変化に関して、会話相手との親密度の観点から検討した。大学新入生を対象とし、３時点のパネル調査を行った結果、入学直後の5月には、うわさが、日常的な話題に比べて親密度の低い相手とでも会話できる話題として機能していた一方で、2月頃になると、うわさも日常的な話題も共に親しい相手と会話するようになることが明らかになった。
43.日常会話におけるうわさと話題の構造	単	2003年9月	日本社会心理学会第44回大会	【掲載ページ】212-213 【概要】大学生が日常会話で話すうわさと日常的な話題を、内容属性および機能の評価の観点から比較し、両者の共通点や相違点について検討した。３種類のうわさと３種類の日常的な話題について、７内容属性と４機能の評価を求め、それぞれ比較したところ、うわさは日常的な話題に比べて曖昧性が高いことが明らかにされた。さらに、不安喚起の高い内容を含むことが、うわさに特徴的であることも見出された。
44.対人コミュニケーションの観点から見たうわさの伝達	単	2002年11月	日本社会心理学会第43回大会	【掲載ページ】770-771 【概要】従来集合現象として扱われてきたうわさを、対人コミュニケーションの側面から捉えなおし、会話相手との話題の共有や、会話における内容の解釈が、うわさの伝達に対して影響を与えるかどうかを検討した。大学生を対象とした２回の時系列調査を行い、うわさの伝達に対人コミュニケーション要因が影響することを明らかにした。
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.頑張り過ぎは失敗のもと―覚醒水準のメカニズム	単	2016年6月1日	教職課程，619，106-107.	教員を目指す学生や現職教員向けの一般雑誌において、覚醒水準とは何かについて、具体的なクラス内の事例を用いて、ヤーキーズ・ドッドソンの法則や、覚醒水準を下げる方法を含めて概説した。
2.社会的ネットワークを理解する	共	2015年8月20日	北大路書房	【共著者】C.カドゥシン(著)、五十嵐祐(監訳)、佐藤有紀、加藤仁、竹中一平、他 【担当部分】全文317頁中35頁、担当：第8章 「スモールワールド，サークル，コミュニケーション」（145-179頁）の翻訳 【概要】社会的ネットワークにおける「スモールワールド」「社会的サークル」「コミュニティ」の形成についてまとめた章を翻訳した。
3.期待をすれば子どもは伸びる？―教師期待効果のメカニズム	単	2015年6月1日	教職課程，41，100-101	教員を目指す学生や現職教員向けの一般雑誌において、教師期待効果とは何かについて、具体的なクラス内の事例を用いて、自己成就予言との関係や、期待のメカニズムを含めて概説した。
4.時系列データの分析と適応感の測定に関する問題の指摘―大	単	2014年2月10日	青年心理学研究，25，171-175	大隅・小塩・小倉・渡邉・大崎・平石（2013）による論文「大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討―第1志望か否か，合格可能性，仲間志向に注目して―」に対する意見を述べた。第1に当該論文

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
隅・小塩・小倉・渡邉・大崎・平石論文へのコメント―				で使用された潜在曲線モデルの結果の記述やその解釈に関する疑問を述べ、第2に従属変数として用いられている適応感に関する疑問を述べた。そして第3に、当該論文で対象とされている「大学新入生」に関する疑問を指摘した。
5.日本基礎心理学会 優秀論文賞	共	2013年12月	日本基礎心理学会	【受賞者】竹中一平・河原純一郎・熊田孝恒 【概要】基礎心理学研究第31巻に掲載された論文「急性ストレスが選択的注意に及ぼす影響」が高く評価され、優秀論文賞を受賞した。
6.日本基礎心理学会 優秀発表賞　受賞	共	2011年12月	日本基礎心理学会	【受賞者】佐藤広英・竹中一平・河原純一郎 【概要】日本基礎心理学会第29回大会（平成22年）において発表された研究「ストレスと知覚負荷が選択的注意に与える影響」が高く評価され、優秀発表賞を受賞した。
7.鼎談「デマと真実の狭間で、 社会的リアリティはいかにして形成されるか」	共	2011年9月	国立情報学研究所ニュースNII Today,第53号	【掲載ページ】4-7 【鼎談者】小林哲郎・竹中一平・森達則 【概要】3月11日の東日本大震災以降、大きな社会問題となったデマや噂話について、それぞれが自身の研究内容を紹介しつつ、それらへの対策について議論した。
8.マーケティング・リサーチの理論と実践―技術編―	共	2007年12月3日	同友館	【共著者】ナレッシュ・K・マルホトラ(著)、日本マーケティング・リサーチ協会(監修)、三木康夫・松井豊(監訳)、小林和夫、竹中一平、他 【担当部分】全文468頁中40頁、担当：第21章 「多次元尺度構成法とコンジョイント分析」（315-355頁）の翻訳 【概要】多次元尺度構成法とコンジョイント分析に関して、それぞれ分析手法の手続きや適用事例について翻訳した。
9.地域防災コミュニティの活性化と家庭内防災力の向上に関する研究	共	2007年3月	文部科学省科学研究費補助金（課題番号：17530465）研究成果報告書	【共著者】西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・松井豊・水田恵三・堀洋元・元吉忠寛・新井洋輔・竹中一平 【担当部分】全文97頁中、担当：第４章「避難所運営訓練システム（STEP）の完成」第３節「完成版の構成」（67-83頁）
10.上武学術奨励賞　受賞	単	2006年9月	筑波大学心友会	【概要】社会心理学研究第21巻に掲載された論文「対人コミュニケーションの観点からみたうわさの伝達」が高く評価され、上武学術奨励賞を受賞した。
11.地域防災コミュニティの活性化に向けた支援プログラムの開発に関する研究	共	2005年3月	文部科学省科学研究費補助金（課題番号：15530413）研究成果報告書	【共著者】西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・松井豊・水田恵三・堀洋元・元吉忠寛・新井洋輔・竹中一平 【担当部分】全文104頁中、担当：第３章「防災訓練プログラム－避難所運営訓練システム－の開発」第３節「訓練システムの開発経緯と進捗」（63-65頁）
６．研究費の取得状況				
1.令和元年度　学部長裁量経費	共	2019年7月10日	武庫川女子大学文学部	【共同研究者】松村憲一・竹中一平・田中美帆 【概要】「人とスマートスピーカーのコミュニケーション分析」のテーマにて、武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科松村憲一准教授及び田中美帆助教との共同研究が採択された。
2.平成23年度 就実教育実践研究センター研究助成	共	2011年4月～2012年3月	就実大学　就実教育実践研究センター	【共同研究者】原奈津子・竹中一平 【概要】「保育者を目指す学生における実習ストレスと実習状況に対するあいまいさとの関連」のテーマにて、就実大学人文科学部原奈津子准教授と共同で助成金を得た。

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2002年4月～現在	日本社会心理学会　会員
2.2002年4月～現在	日本心理学会　会員